

## 特定疾患医療受給者の実態

### 疾患別・性・年齢別受給者数とその時間的变化

オオタ	アキコ	ナガイ	マサキ	ニシナ	モトコ
太田	晶子*	永井	正規*	仁科	基子*
シバザキ	サトミ	イシジマ	ヒデキ	イズミダ	ミチコ
柴崎	智美*	石島	英樹*	泉田	美知子*

**目的** 2002年度特定疾患医療受給者の疾患別の性、年齢分布およびその時間的变化など、基本的記述疫学的特徴を明らかにすることを目的とする。

**方法** 2002年度地域保健・老人保健事業報告を用い、疾患別に受給者数、性・年齢別受給者数を集計した。受給者数の年次比較には、1984, 1988, 1992, 1997年度の受給者全国調査結果を用い、疾患別に性・年齢別受給者数（人口10万対）の推移を記述した。

**結果** 2002年度の全受給者数は、527,047（男213,198, 女313,849）であり、受給者数は調査年度を追う毎に増加していた。男女ともに50歳代以上の受給者が多く、受給者数は特に高齢者で増加がみられた。ほとんどの疾患で受給者数は増加しているが、増加の程度は年齢によって異なり、一部の年齢では減少している疾患もあった。全身性エリテマトーデス（SLE）、大動脈炎症候群では、女の30～50歳代の受給者が増加しており、受給者数が最大となる年齢が年次を追うに従い30歳代から40歳代、50歳代に移動していた。潰瘍性大腸炎、クローン病では、若年者の増加が大きかった。また受給者数が最大となる年齢が年次を追うに従い20歳代から30歳代に移動していた。パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、後縦靭帯骨化症などでは、高齢者の増加が大きく、とくに1992～1997年度にかけて、70歳以上の受給者の増加が大きかった。特発性血小板減少性紫斑病、ウィリス動脈輪閉塞症では、中高齢者が増加しているが若年者では減少していた。その他、サルコイドーシスでは、女は中高齢者で、男は若年者で増加が目立つなど、疾患によって異なった変化が観察された。

**結論** 2002年度の特定疾患医療受給者の疾患別の性、年齢分布およびその時間的变化など、基本的記述疫学的特徴を明らかにした。受給者数は年度を追う毎に増加していた。疾患ごとに、性・年齢別受給者数の変化の特徴が異なっていたが、受給者数に影響を及ぼす要因も疾患によって異なると考えられた。難病の疫学像は今後も変化していくものと考えられ、受給者数を継続的に把握していく必要があると考える。

**Key words** : 難病, 特定疾患医療受給者, 地域保健・老人保健事業報告, 受給者全国調査

---

\* 埼玉医科大学医学部公衆衛生学教室  
連絡先：〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38  
埼玉医科大学医学部公衆衛生学教室 太田晶子